

劇あそびを中心として

— 保育効果の研究 (下) —



一、自由保育と劇あそび

一体に幼稚園の教師は、無反省に、そして無意識的に「自由保育」にあこがれるようである。これは、自由保育そのもの子どもに対する意義とといったような深いところに根ざしているものではなく、むしろ単に自由ということばの上でのあこがれが強いように思われる。このことは、実際に保育を参観し、また教師の研究会などに参加してみても一番強く感じられるし、また一応口先では、自由保育を賛美しながら、その反面で全くこれと相反する矛盾した強制保育とも呼ぶべき保育を平気でおこなっているという事実からも言い得ることである。もちろん、日常の保育が、一から十まで、なにがなんでも自由保育一点ばり、あるいは強制的な一斉保育ばかりという形式は、特殊な例を除いては現実にあまり見られない。この意味から、前記のような態度がすべて誤っているとはいえない。しか

村山貞雄 多田淑子
高橋種昭 植松治子
日名子太郎

し、それが、子どもとの関係なく、全く無反省におこなわれる場合には、問題となるのである。このような事實は、一年間の保育の流れの中から無数にひろい出せるのであるが、ここでは、そのうちの一つとして「劇あそび」をとりあげてみることにした。というのは、劇あそびという名の下に、劇練習、劇発表といったことに重点をおき、そのために、大切な保育を棚上げにして、極端な場合、第二期の全部、あるいは第三学期の全部をそれにあてているような園が少なくないからである。(このことは、小学校においても学芸会などで一部見られる現象であるが、学習内容、段階の相違から、幾分問題が異なってくる)

いま、「幼稚園教育要領」に示された目標の中から、劇に關係のあるものを挙げてみると、
「自由な表現活動によって、創造性を豊かにする。」
という項の中に、

○ごっこ遊び、劇遊びなどによって、生活感情を表現するようになる。

これでも明らかな如く、劇、あそびが幼稚園でおこなわれるねらいは、「自由な表現活動によって、創造性を豊かにすることなのであり、生活感情を表現するようにすること」なのである。(ただし、このねらいを達成するに必要と思われる望ましい経験の展開が教育要領においてじゅうぶんでない点は、たいへん不備であり、現場の誤解をまねいても仕方のない点が少なくない。)もしこのねらいが、本当に現場の教師に理解されていれば、前述のような誤った指導の仕方はおこなはずなのであるが、現実には「保育の効果」というものが、とかく劇の出来ばえとか舞踊の発表などの形で親や世間から評価されがちだが、それをかき乱す大きな原因となっているのである。そこで、本篇では、さきに日本保育学会第十二回大会で発表した資料を中心に、これらの点について考えていこう。

二、脚本による劇指導の可否

現実には、脚本—それもおとなが予め書きおろした既成のもの—に立脚して、幼児に口移しに台詞を教え、さらに動作まで指導するといったことがおこなわれている以上、これがどんな結果を幼児にもたらすかを、教師として知らなければならぬ。

我々の実施した実験では、市販の脚本は用いず、絵本をもとにし

て実験者が作成したものをを用いた関係上、かなり念頭に被験者となる幼児の能力がおかれていた為か、教えこむこと自体には、さほど問題となる点はなかったのである。これは、「練習中における参加の態度」を、予め設定した五段階評定尺度によって、指導期間中観察評定した結果が、下の第1表の如くであり、「いやだけれども参加する」、「参加しない」、「まったく皆無となっていることである程度推察される。

評価	+2	+1	0	-1	-2
人数	31.0	41.4	27.6	0	0

第1表 練習中の参加態度

評価	+2	+1	0	-1	-2
人数	13.6	61.0	11.8	13.6	0

第2表 練習中の協力態度

しかし、「練習中における協力態度」では、「うながされてしぶしぶ協力をする」、「1」が、第2表のように表われているが、他の自由遊びから劇あそびに発展させたグループでも若干は表われているから、それほど強調されるべきではないように思う。

次に、「語いの変化」をみると、予想に反して(というのは、一定の脚本に基づいて台詞を教えた結果、当然のことながら学習効果が現われ練習した台詞中に含まれることばの語いが増すと考えられたことを予想した)、実験前に理解できなかったことばの数と、実験後におけるそれとを比較してみると、次頁の第3表の通りであり、著るしい変化が見られない。

被験者	性別	I. Q.	
		(1)	(2)
A グループ	1	107	103
	2	103	80
	3	91	109
	4	96	92
	5	110	100
	6	122	91
	7	96	92
	8	114	98
	9	114	96
	10	104	109
B グループ	1	115	87
	2	108	102
	3	97	92
	4	114	98
	5	121	109
	6	131	90
	7	110	92
	8	105	109
	9	111	91
	10	108	91

ただし (1)鈴木・びねー式個人検査による
(2)幼児用田中B式団体検査による

第4表 知能の程度

に入れられていない。しかし、この実験の場合、実験者の観察によれば、自由遊びの発展性、逆に脚本による台詞の記憶、演技などが、極めて知的能力に支配されることが報告されている。これ以上の詳しい資料がないので、余り詳細にはいえぬけれども、このような観点からの保育方法への反省がなされなければならぬことを注意したい。特に、幼稚園では、集会などで教師が発言する場合、「自分の園では……」という言い方で、その園内で接した幼児だけを通じて得た体験から、全般的な幼児に関しての推論を下しがちであるけれども、優秀

Group	性別	男子	女子	総合
		(1)	107.6	103.8
Group A	(2)	94.3	99.8	97.0
Group B	(1)	113.4	110.6	112.0
	(2)	97.0	95.2	96.1

第5表 知能の平均値
I. Q. (1)……鈴木びねー式個人検査
(2)……幼児用田中B式団体検査

四、保育効果の研究における今後の問題

児の多い園と、それほどでもない園とでは、余程違うということも考えておかなければいけないと思う。おそらくもっとも知能の高いグループを編成して実験すれば、他の結果が見られたかもしれない。

我々の採用した実験的な研究は、最初にも述べたように、極めて不備なものであるが、それにもかかわらず、多くの示唆を与えてくれた。保育効果の研究は、幼児教育における評価法の研究とともに、保育におけるもっとも基本的な問題であるにもかかわらず、今日、主として方法論、カリキュラム論的なものが多いのは、一応、この種の研究が、困難を伴うということ、また日常の保育が、経験的に、これらの点を把握しておけば事足りるといった理由から、等閑視されてきたようである。しかし、この種の研究が進められ、自然的な成長ばかりではなく、人間の発達を促すに必要な、能率を考えた保育というものが、考えられるようにならなければいけないのではなからうか。

このような意味からも、テスト法や観察法を駆使して、日常保育における幼児の実態を把握していくことも一つのよい方法であるけれども、同時に、いろいろな制約は当然あるにしても、実験的な方法が漸次とり入れられて、一つ一つの分野における問題が少しでも解明され、あるいは問題点が把握されて来てこそ、方法論的な面に關しても、根本的な理論への手がかりが得られるであろう。